

UNIVERSITY LIBRARY,
TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITYHACHIOJI-SHI, TOKYO
TOSHITAKA KAWAMURA

東京都立大学 図書館

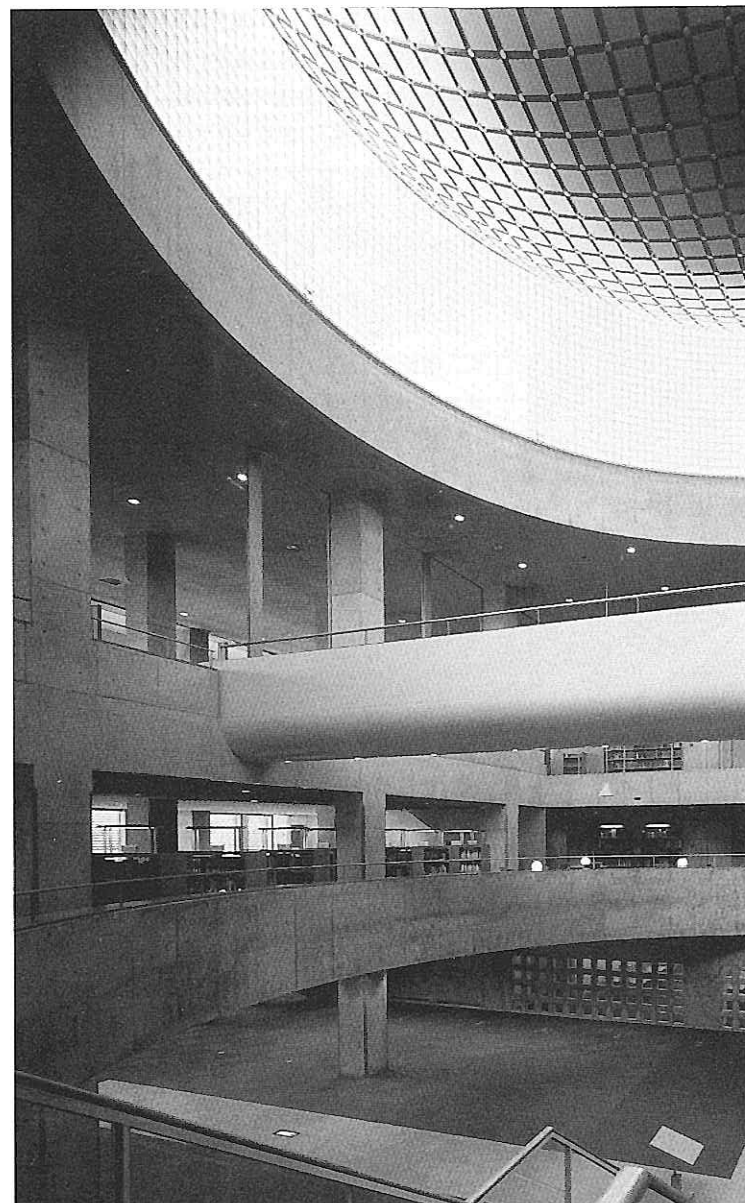
竣工：1991年 東京都八王子市

河村敏孝

1979年卒業

(株)第一工房

共同設計者：(株)第一工房



*写真提供：新建築社

1991年に八王子市へ全面移転をするために造られた東京都立大学の新しいキャンパス内の図書館。キャンパスの長軸、約1.5kmを形成する2本の軸の屈折点に位置しているため、シンメトリックなファサードの本体と、やや振れて取り付けられている管理棟とで構成されている。外観はフッ素樹脂塗装のアルミパネルで覆っている。平面形状もシンメトリックで、3層の吹抜を挟んで開架書庫と閲覧室が対面している。この吹抜は、設計の初期段階からイメージされていたもので、デザインはこれを活かす方向で進められた。吹抜の底部に位置するメインホールに立つと、3層までの書庫を一目で見渡すことができる。たくさんの書籍に囲まれた雰囲気は、いかにも図書館に来たことを意識させてくれる。

この吹抜には3種の装置を持ち込んでいる。1つは鉄板を折り曲げたような階段で、軽快さを意識してデザインされた。2つめはブリッジで、3階レベルで閲覧室と開架書庫とをつないでいる。3つめはガラスブロックのハイサイドライトとアルミパネルの球面天井で、ここで拡散された光は、吹抜の下まで柔らかかくとどく。これらのすべてがコンクリート打放し仕上げと取り合いになるため、ディテールはコンクリート打設前日まで検討された。

●作品概要

主な用途：大学 図書館

敷地面積：427,293 m²建築面積：3,664.2 m²延床面積：9,608.1 m²

規模：地上3階 地下2階、塔屋1階

高さ：18.6 m

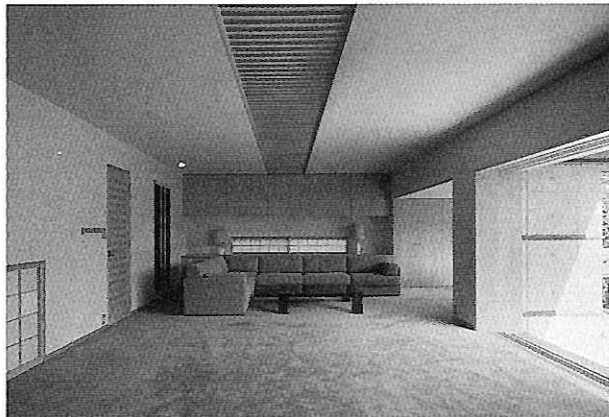
主な構造：SRC造

4 住宅のデザイン

ここでは、住宅の設計作品をまとめてある。SHシリーズに代表されるように、広瀬研究室と住宅設計はきってもきれない縁がある。何かと耳にする広瀬の住宅建築論に触発された卒業生も、多くいるはずである。また、住宅部品化や生活備品、収納などの研究に携わっていた卒業生も多く、そうした周りの影響を受けた人々もいよう。さらに、これは他の研究室では経験できないことかもしれないが、肆木の家で自ら「家づくり」の体験をした卒業生もいる。(編者)

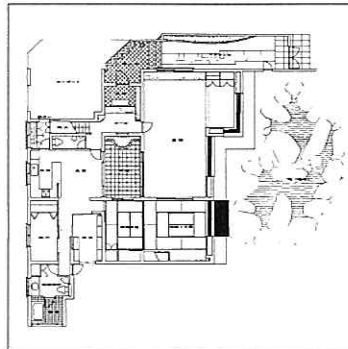
A HOUSE IN TSURUMAKI-ONSEN

TSURUMAKI, HADANO-SHI, KANAGAWA
TETSUYA YAMAMOTO, ICHIRO MORINAGA, HIRONARI
SAKURAGI, FUMIKO INOUE

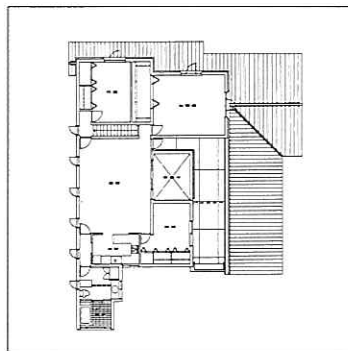


鶴巻温泉の家

竣工：1989年 神奈川県秦野市鶴巻
山本哲也 1981年卒業、森永一郎 1986年卒業、
桜木浩成 1988年卒業、井上富美子 1973年卒業
(株)井上尚夫総合計画事務所



1階平面図



2階平面図

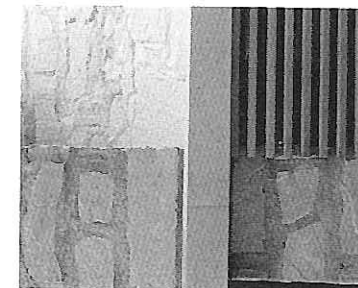
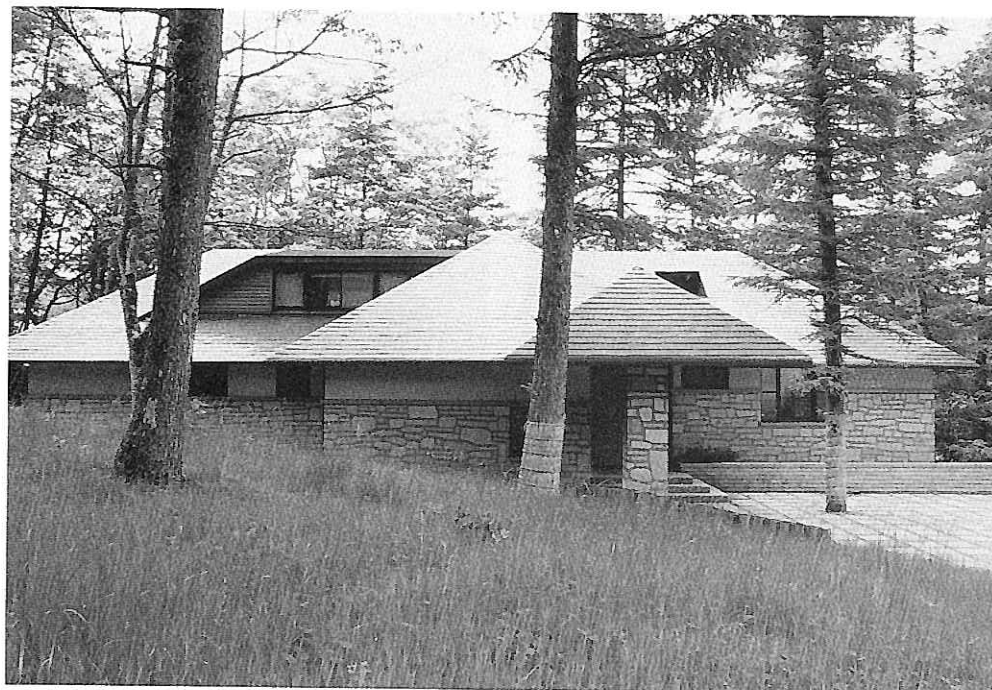
東京の奥座敷と呼ばれる街、鶴巻温泉。古い屋敷風の旅館と住宅が甕を連れ、郷愁を感じさせる町並みとなっている。この街に「在る」ことの表現として、蔵屋敷をイメージした。一文字瓦によるゆったりとした重層感ある屋根、瓦状ポータイルの埋め込まれた打ち放しの質感ある壁体。この二者の響き合いから生ずる陰影ある落ち着いた表情を目指した。地元の開業医である施主は、2世帯、多い来客、既存の庭園を生かす、という3つの条件を出した。そこで世帯を1、2階に分け、1階平面を来客ゾーンとしてのハレの空間（表）と、日常生活ゾーンとしてのケの空間（裏）とに明確に分けることにした。ハレの空間は既存の枯山水の庭園と対峙しつつ、その全面引き込みの開口部により同化する。ケの空間は裏に控えながら坪庭により採光、換気、居住性を高く維持する。そしてそのハレとケの空間が、視線・動線の遮断・連続を繰り返しながら有機的につながってサーキュレーションする。

●作品概要

主な用途：住宅
敷地面積：494㎡
建築面積：214㎡
延床面積：339㎡
規模：地上2階、地下1階
高さ：8m
主な構造：RC造

A WEEKEND HOUSE IN LAKE YAMANAKA

YAMANAKAKO-MURA, MINAMITSURU-GUN, YAMANASHI
YOSHIKI SYAKUTA



山中湖の別荘

竣工：1991年 山梨県南都留郡山中湖村
尺田可規
1977年卒業
(株)スクエア
共同設計者：杉本喜一

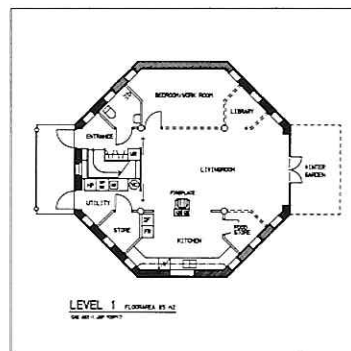
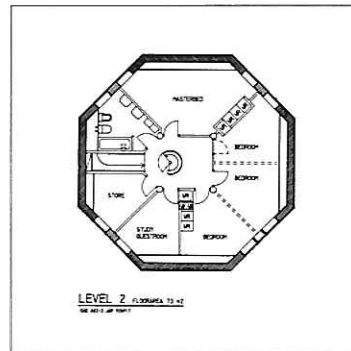
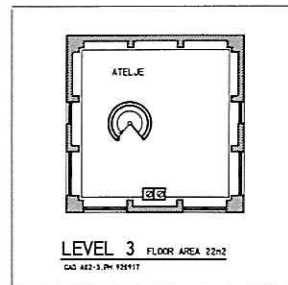
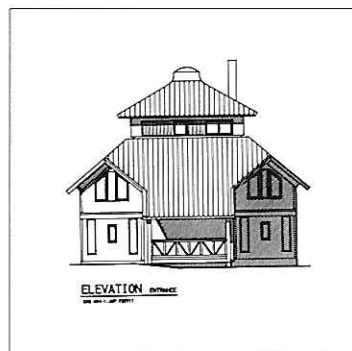
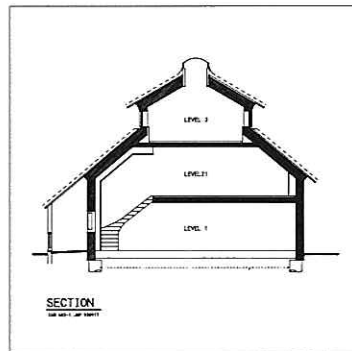
豊かな自然に包まれたこの別荘は、砂岩によって覆われた垂直の壁、柱、水平にのびる大きな屋根、テラスで構成されている。この別荘は、周囲に自生するマツなどの樹木の垂直性と、ゆるやかな傾斜をみせながら広がる大地の水平性の、建築への「転写」を意図したものである。アプローチを受け止めるように配された「壁」は、自然の中に入り込むにしたがって「柱」に変化し、周囲の空気を内部へと招き入れている。その変化とともに敷地は下降し、水平な屋根とによって生じる「間」は、結果として宙に浮いた空間をつくり出した。こうしたことが、この別荘の主な空間を「樹上の巣」のような雰囲気に行っている。素材もできる限り自然な中から選び、また、ドアやスクリーンに用いたY字型のモチーフも、森の木々からの引用である。暖炉にきらめく火を囲みながら、環境からの転写によって映し込まれた空間に身を置くと、森の木々が語る物語が聞こえてくる。そんな自然とのかかわり合いが生み出したのではないかと思う。この計画は、事務所を開設して2年目に出会ったものである。それまでに学んできた建築の、まとめの意味も含め、できるだけ感性的に「自然の中の家」をテーマに設計しようと試みた。したがっていささかオーソドックスではあるが、われわれにとって規範となる重要な建物となったのである。

●作品概要

主な用途：別荘
敷地面積：7,263㎡
建築面積：540㎡
延床面積：452㎡
規模：地上2階
高さ：7.8m
主な構造：RC造

THE FAIRY-TALE HOUSE 1

VILLA SEIRSTAD: DRAMMEN-CITY, NORWAY
 VILLA HOLMSTROM: GOTHENBURG, SWEDEN
 OLA TORRANG



フェアリーテイル・ハウス 1

竣工：1987年 ドランメン・シティ、ノルウェー

竣工：1992年 ヨーテボリ、スウェーデン

オーラ・トーラング

1970～71年広瀬研究室在籍

「フェアリーテイル・ハウス1」はプレファブ化された、エネルギー効率のよい住宅システムで、ワンファミリー用である。建物の形態や窓の配置は、小さな敷地でも適できるようにデザインされているのが特徴で、延床面積は157㎡から200㎡程度に設定されている。自立性のあるプレキャストコンクリートによる構造躯体を採用しているため、内部はフレキシブルなプランニングが可能である。建物は1階2階では八角形の平面をもち、外壁の表面積を効率的にすると同時に、敷地への適合性を高めている。塩ビパイプによる温水床暖房に加えて、暖炉が設置されるなど、雪国の快適な生活への配慮も十分である。この住宅システムは50トンクレーンを使用して、5人が5日間で組立ができ、工期も効率的である。なお、このデザインは日本のほかヨーロッパ数カ国で特許を取得している。

●作品概要

主な用途：住宅

建築面積：85㎡

延床面積：180㎡

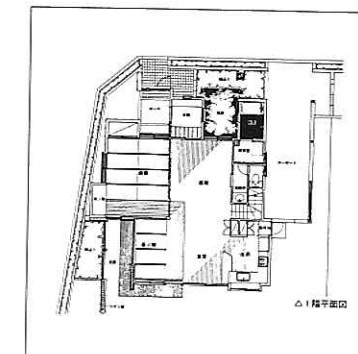
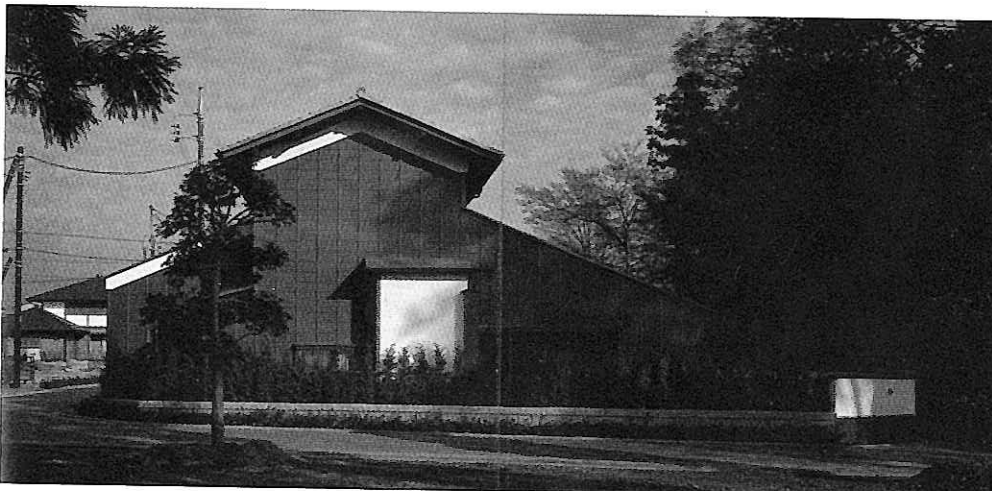
規模：地上3階

主な構造：プレキャストRC造

A HOUSE WITH LIGHT COURT

KOGA-SHI, IBARAGI

JUNJI HASEGAWA



光庭のある家

竣工：1991年 茨城県古河市

長谷川順持

1986年卒業

連合設計社市ヶ谷建築事務所

共同設計者：連合設計社市ヶ谷建築事務所

古河市は、緩やかに歴史的な様相を残す町である。敷地は神社を核とした40区画からなる住宅地で、このうちの20区画を公社が買い取り、町並み景観を重視した建売住宅を建設する。この家は敷地の入り口に建ち、平入りの町並みのスタートを担う。屋根勾配や素材はこの町の共通コードに従いながら、新しい町を予感させる姿を表出する。特に配慮したのは、生活道路として歩行者重視で計画した道との境界のつくり様である。堀や門扉を2次的に付加させることなく建築化する。「わが家の外壁は町の内壁である」という西洋的な街路と建物の関係に学び、さらにプライバシーへの新たな思考として可動する堀により、住み手の内発的選択で開発可能な境界を加える。かつての日本の町家にみられる透明感ある境界をつくる格子スクリーンで、緩やかに道と生活空間を関連づける場をもたせる。間取りはこうした外部との関係性を受けながら、田の字型プランを核として展開。閉じる、開く、で空間の規定や様相もさまざまに変化する。個室も固定的につくらず、結界的にしつらえる。引き戸を主体とした区画は住み方の時間的変化にも対応可能となろう。架構は2間半と1間の架構グリッドを牛梁と投げ掛け梁で構成。こうした木組みも含めて、和風という解釈ではなく、日本的なものの現代的な継承を考察、形象化していきたいと考えている。

●作品概要

主な用途：住宅

敷地面積：291.9㎡

建築面積：99.7㎡

延床面積：145.2㎡

規模：地上2階

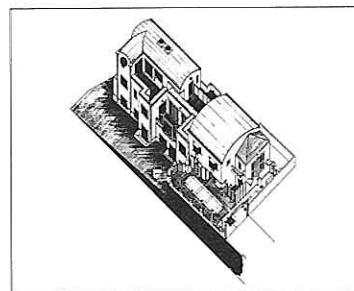
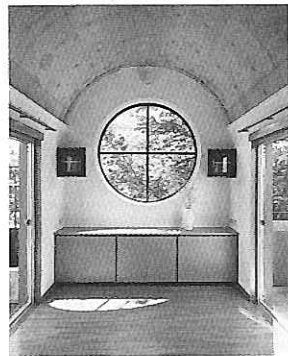
高さ：5.2m（最高軒高）

主な構造：W造

*写真撮影：木寺安彦（外観）、安川知秋（内観）

CASA-MIA

KUGAYAMA, SUGINAMI-KU, TOKYO
KOICHI HAGA



CASA-MIA (島本邸)

竣工：1989年 東京都杉並区久我山
芳賀康一
1978年卒業
K'S PLANNING COMPANY

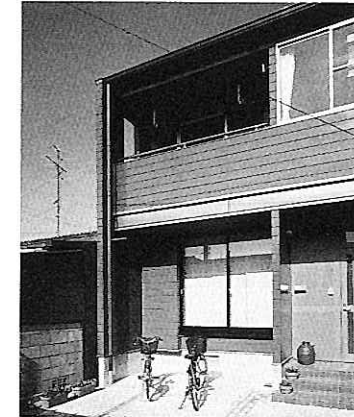
敷地は1区画200~300坪という、一般的にいう良好な住宅地であるが、京王井の頭線に面しているため、音と振動が気になった。夫婦と子供2人、施主の母親の5人家族で、要求条件は2世帯住宅と賃貸マンションであった。結局、資金計画的に賃貸4所帯を含む6所帯の集合住宅とした。近隣への配慮から敷地の高低差を利用した断面計画とし、高さはできる限りおさえてある。敷地内に3本の見事なサクラの木があったが、このうちの2本を残すことになり、配置とプランが決まった。予条件の把握をし、設計の手掛かりを探すために、いつものように何度か敷地に通った。緑が多く建物も密集していない地域だが、周辺の建物とその連続には何も手掛かりを見出せなかった。そのうち、隣家はタイル貼りの共同住宅を建てるだろうという予感がしてきた。このとき、モノトーンの塊をつくらうと思立った。3年後、予感的中し、隣にはレンガタイル貼りの共同住宅が建っている。

●作品概要

主な用途：集合住宅
敷地面積：492.5 m²
建築面積：193.5 m²
延床面積：417.1 m²
規模：地上2階、地下1階
高さ：7.9 m (平均地盤より)
主な構造：RC造

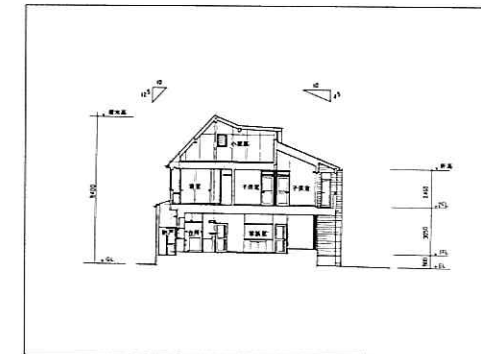
S HOUSE

KAGAMIGAHARA-SHI, GIFU
KIYOHITO KITAMURA

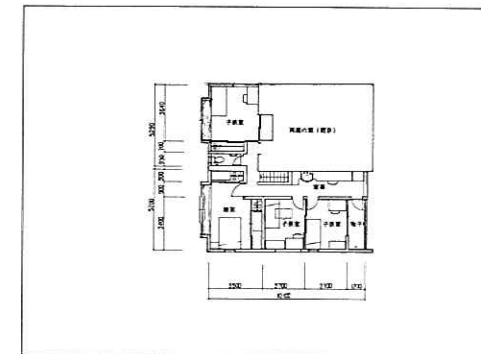


S邸

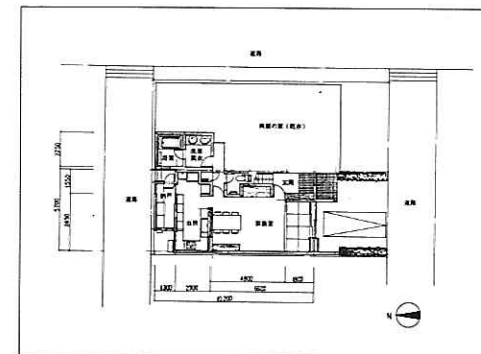
竣工：1992年 岐阜県各務原市
北村清仁 (1980年卒業)



断面図



2階平面図



1階平面図

環境問題だ、エコロジーだと、地球史上最悪の生物たちの大合唱がわき上がっている。設計者としても、この問題は避けて通れそうもない。現在、9坪ほどの市民農園を借りて野菜づくりをしている。手間はかかるが、ちゃんと土をつくってやると、けっこう立派な無農薬野菜ができる。生ごみもコンポストで処理するようになって、量を3分の1に減らすことができ、肥料もできた。自分のデザインの姿勢も、まずこういった自然の潜在的な力を呼び込むことが大切であり、その力を意匠で表現しながら人間の意識内に植えつけることが重要だと思う。そういったことを考えるきっかけになったのが、この住宅である。2階の家事作業台のある吹き抜け空間と、小屋裏とを連続させ、外部と内部の熱の緩衝空間とした。冬はトップライトの光で暖かく、夏はほどよく風が通い、エアコンもほとんど必要ないほどだ。最近ではOMソーラーを使っているが、機械にたよるという点は、正直いって引掛かるものがある。毎回試行錯誤と自己嫌悪の連続だが、このテーマとは別れられそうもない。

●作品概要

主な用途：住宅
敷地面積：84.3 m²
建築面積：50.2 m²
延床面積：100.2 m²
規模：地上2階
高さ：9.6 m

HOSAKA'S HOUSE

YOKOHAMA-SHI, KANAGAWA
KAZUNORI YADOMOTO

保坂邸

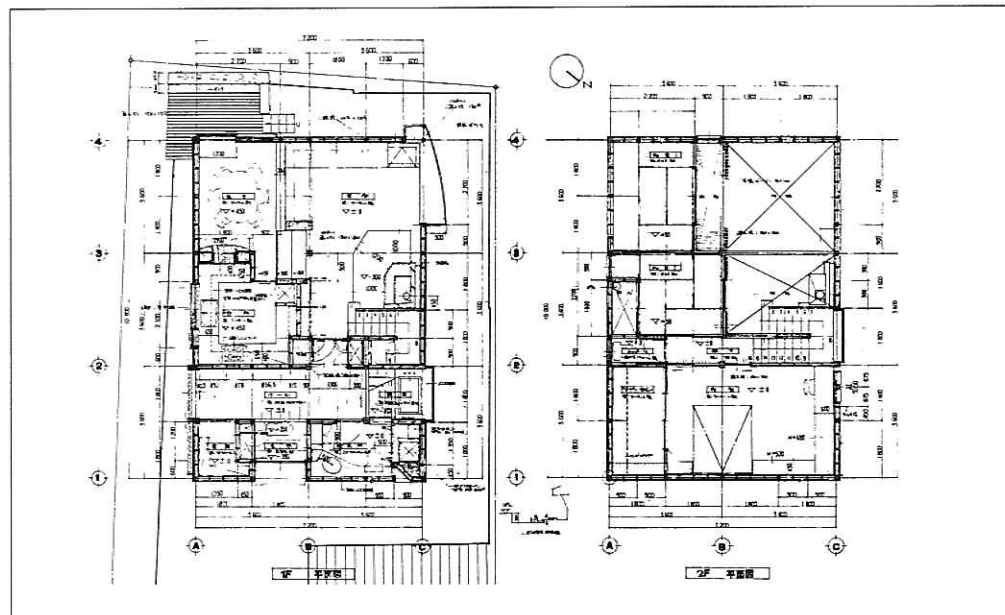
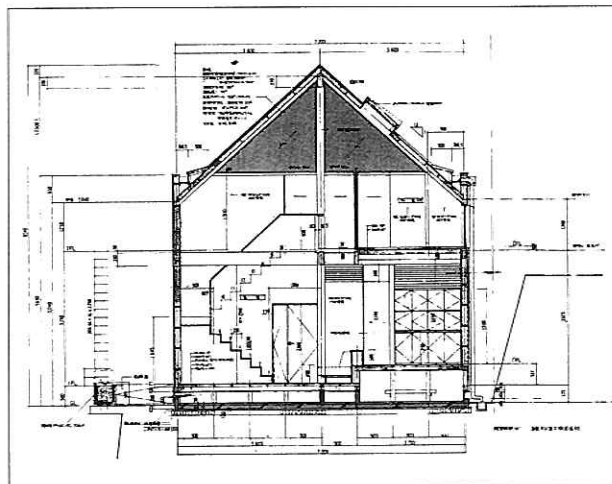
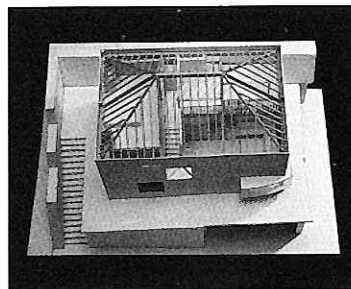
竣工：1992年（予定） 神奈川県横浜市緑区

宿本和則

1982年卒業

横河設計工房

設計者：横河 健（横河設計工房）



これは現在の所属事務所で担当している仕事。私の作品ではないが、担当者として、学生時代に学んだことや現在まで 経験を生かした作品として、よい機会だったと思う。設計開始から着工までに2年半がたち、ただでさえ設計期間の長いわれわれの事務所の中でも、異例に長い作品となった。辛抱強く待ってくれた施主にひたすら感謝するのみだ。よい建築をつくるには、よい施主も条件の一つだと痛感した。建物は2間×2間を1グリッドとし、2×3グリッドの単純な平面を基本としている。道路面から5~7m上がった雑段の上の敷地なので、下から見上げるとシンプルな箱に見えるように、木造ながら内樋にして屋根面を見えないようにしてある。通常ならば、1F+2F+屋根裏の構成にするところを、天井の高い1F+屋根裏部屋の2Fとして、それぞれの空間を豊かにしていること。また、外からは四角い箱にしか見えないが、内部の居間に入ると、吹抜により建物全体の小屋裏がすべて見え、勾配のある大空間に包まれるようにデザインされている。さらに、この最高8mのダイナミックな空間がある一方で、寝室は屋根裏部屋のイメージで、生活のシーンと呼応した豊かな空間になるはずである。偶然にも、この家は、施主の初めての赤ちゃんと一緒に誕生日となる予定である。

●作品概要

主な用途：住宅

敷地面積：206.7㎡

建築面積：77.8㎡

延床面積：130.9㎡

規模：地上2階

高さ：8.5m

主な構造：W造

5 環境計画へのアプローチ

ここでは環境計画、街づくりにつながるデザインをまとめてある。広瀬研究室時代に、鎌倉の若宮大路の景観計画など、景観計画、環境評価の研究を手伝った卒業生も何人かいる。また、一時さかんだったデザインサーベイなどに影響された人々もいよう。環境計画分野での卒業生作品も、歴史的な景観の保存やデザインなどへ広がりを見せているが、それらは整理の都合で歴史の分野に入れてある。

(編者)

AN URBAN DESIGN FOR MOTOMACHI, YOKOHAMA

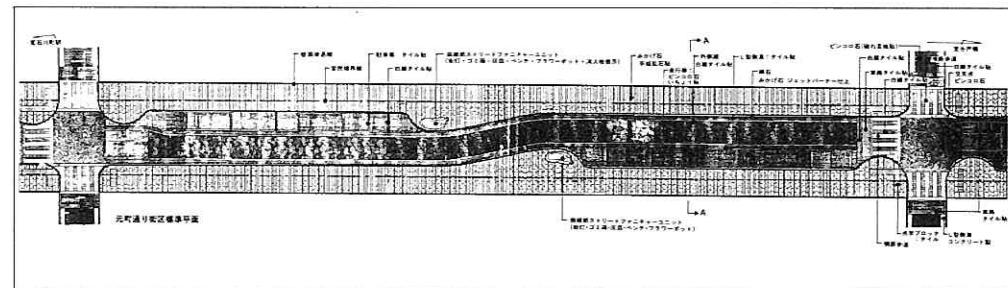
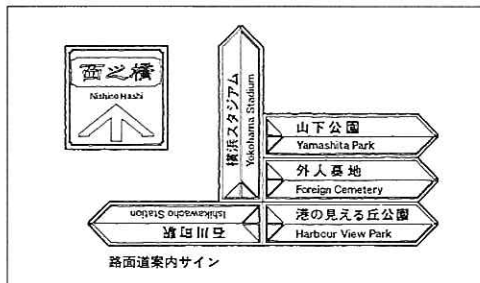
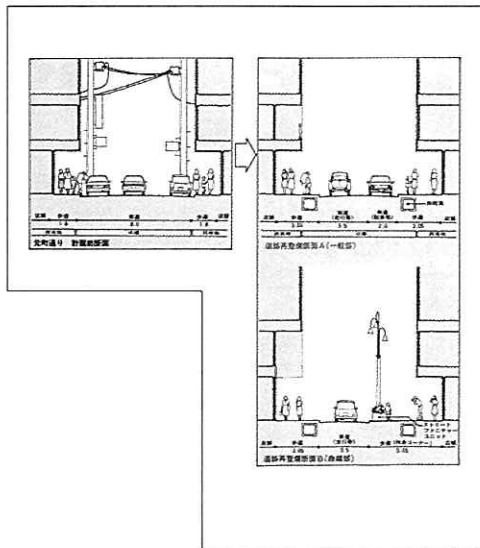
YOKOHAMA-SHI, KANAGAWA
TSUNEO KANEKO

横浜元町デザイン計画

神奈川県横浜市
金子恒雄
1967年卒業
(株)ユー・アール・ユー総合研究所



石川町駅側より元町通りを見る。手前から5丁目、4丁目、……



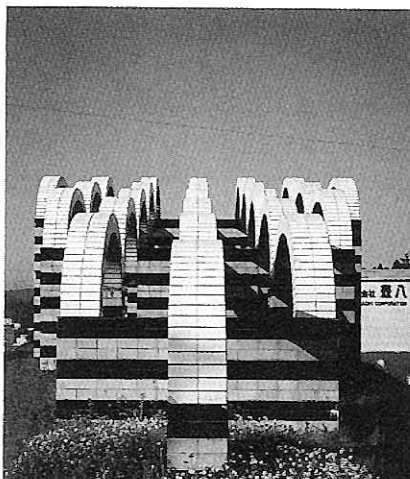
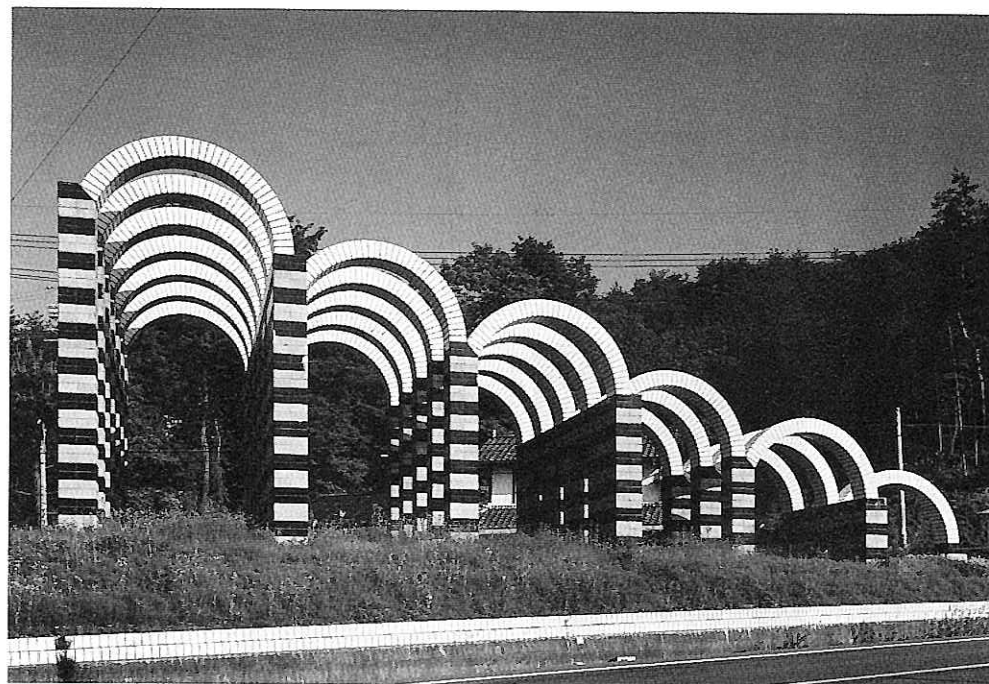
横浜生まれの僕は昭和30年代の半ばから、よく元町をぶらついていたが、当時は木造の平屋か2階建てがほとんどだった。波止場や山手の才媛の学舎に通じるこの街は、洒落たモダンなイメージと異郷の香りがしたものだ。昭和48年に、この街の宝石店の設計を手がけたことから、街との関係は深まっていた。中華街側の掘割川の上部に高速道路が建設される計画を知り、同時に市がフルモール化をはたらきかけている事態に驚いた。伊勢佐木町と同じ手法で進められたらたいへんだと、昭和54年以来、街の有志との定期的な話し合いの場をもつことになった。まず、街の歴史や伝統、周辺地区との性格比較や顧客分析などを把握し、商業者と消費者、周辺地区との相関関係をよく調べてみることから始めた。単なる道路整備ではなく、街の現状をいかに保護し、修正するのかを考えねばならない。こうして街づくりの推進気運を高め、行政も含めて組織化するのに3年を要した。この間、僕は欧米の代表的な商店街を30近くも見て回り、元町の改善点を明確に整理できるようにした。昭和58年に街づくり委員会を組織して以来、今日までに街の全建物数の7割に当たる90軒ほどの新築・増改築が終わった。これに外装の再塗装なども含めると、相当数の店舗が街づくりに参加したことになる。現在は、街づくり協定の細則の見直し中である。

SHIGARAKI SYMBOL MONUMENT I

SHIGARAKI-MACHI, KOUGA-GUN, SHIGA
JYOJI NIWA

信楽シンボルモニュメントI「出発(たびだち)」

竣工：1985年 滋賀県甲賀郡信楽町
丹羽謙治
1973年卒業
(株)デザインサークル



滋賀県の「小さな世界都市づくりモデル事業」と信楽町の「焼きものを生かしたまちづくり事業」のために、一般公募によるモニュメントのコンペティションが行われ、当選案として実施したものである。デザインのモチーフは「登り窯」である。三角形の敷地の頂部から、1本の柱を起点として後方に強いストライプの柱と壁を増幅させ、対比的な白いアーチで連結した。照明器具は壁面開口部の上部に設置した。地面に光を反射させて壁面、アーチ下面を照らし出し、夜間における異なる表情の演出をねらった。後方階段よりモニュメント内に入ることができる。内部は、空間を感じとり、視点の移動による形態の変化を実体験できる場所とした。

●作品概要
主な用途：モニュメント
敷地面積：346㎡
建築面積：81㎡
高さ：6m
主な構造：RC造

THE GREEN MALL IN KAMIOOKA

YOKOHAMA-SHI, KANAGAWA
TOSHIO KATSUYAMA

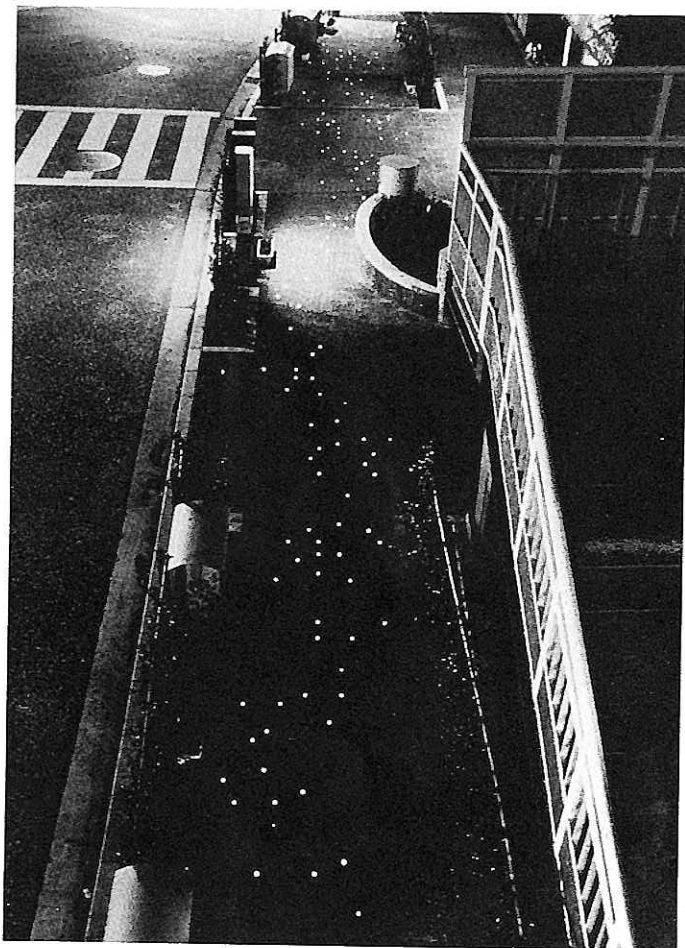
上大岡グリーン通り

竣工：1989年 神奈川県横浜市港南区

勝山敏雄

(株)新居千秋都市建築設計

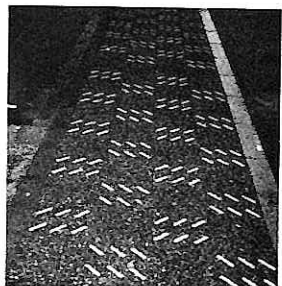
設計者：(株)新居千秋都市建築設計(新居千秋、森信人、勝山敏雄)



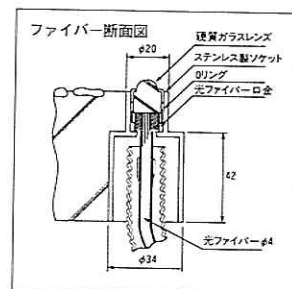
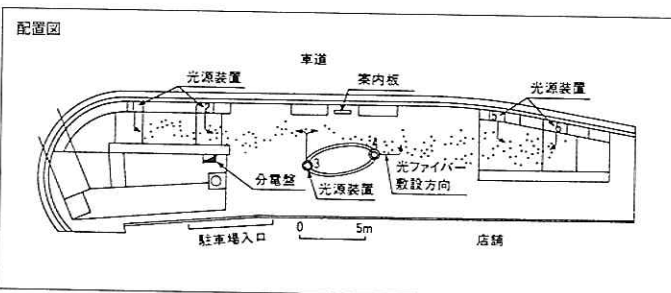
模型によるスタディ



平板パターンの検討



洗い出し平板



横浜市上大岡、旧鎌倉街道の長さ250m余りのグリーン通り商店街の街路計画において、古くから川の恩恵を受けていたことや和風にしたいとの要望を受け、何度も検討を繰り返した中で浮かんできたコンセプトは、「大地に舞い降りた天の川」と「大地に敷き詰められた緋」であった。

大学院を修了し、初めて携わったプロジェクトで、模型によるスタディ、路面のパターン検討を始め、商店会の方々やメーカーとの打ち合わせに参加し、現場監理まで担当した。

緋を表現するために、路面の仕上げは玉砂利の洗い出し平板に青いタイルやビー玉を埋め込んだ。タイルの埋め込みパターンやビー玉の数量の検討をし、試作を行った。最終的には実際に平板製作の工場に行き、既製の平板製作工程の枠の中で、この平板製作ができるよう製作側と打ち合わせた。また、天の川を表現するためには、星座早見板の天の川を図面に描き込み、光ファイバーを埋め込んだ平板のパターン化した。光ファイバーを屋外で、路面に使用するのは初の試みであり、メーカーの協力をえて開発に取り組んだ。平板への埋め込みやメンテナンスの方法等の検討も繰り返した。現場では実際の施工にあたり、工事業者と施工手順や方法を検討し、施工実験も行い、結局、電気工事と平板工事が同時に入り、光ファイバーを通線しながら平板を敷く方法で施工した。

●作品概要

主な用途：ショッピングモール

規模：街路延長255m

仕上げ：歩道—洗い出し平板

車道—特殊アスファルト舗装

その他—光ファイバー、掲示板、街路灯、光源装置ボックス

6

設計競技への挑戦

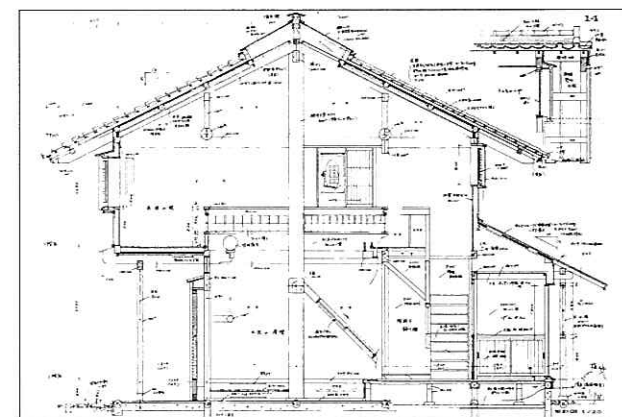
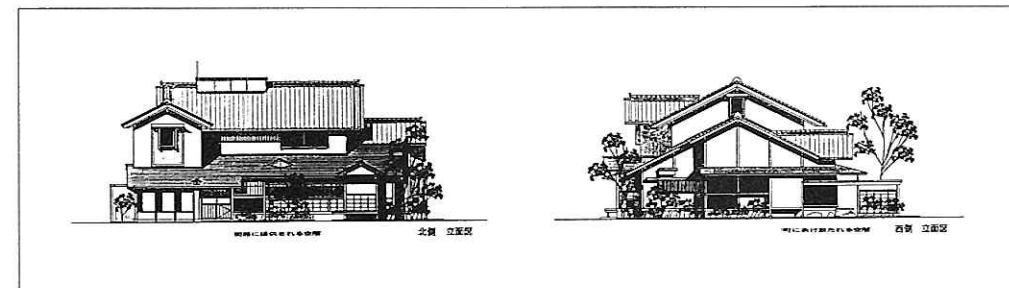
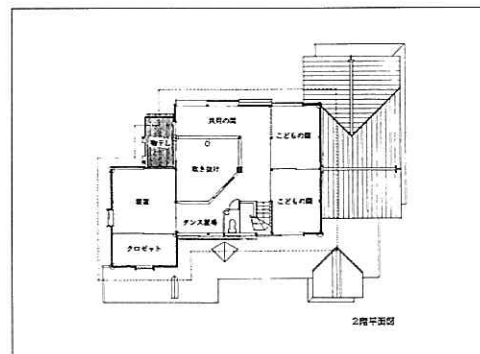
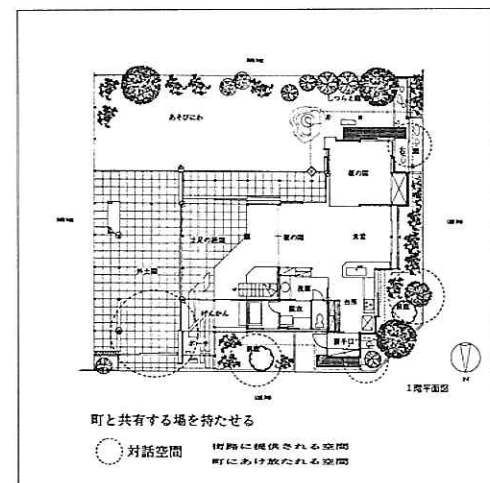
コンペのさかんなヨーロッパほどではないにせよ、国内外のさまざまな設計競技が新人建築家の登竜門であったり、実施設計のプロジェクト獲得の手段であったりする事情には変わらない。ここでは、こうしたさまざまなコンペ作品をまとめた。中には実施される予定のものもあるし、イメージコンペ的にアイデアのみを競う性格のものもある。(編者)

A HOUSE OPEN TO THE COMMUNITY

SAKURAI-SHI, NARA
JUNJI HASEGAWA

町と対話する住まい

奈住協実施設計競技 建設大臣賞受賞
竣工：1994年予定 奈良県桜井市
長谷川順持
1986年卒業
(株) 連合設計社市ヶ谷建築事務所



奈良の地に実現する設計競技参加作品である。地域の文脈を考慮し、屋根勾配や素材のおおまかな枠組みを設定した。角地北入りの敷地条件に本案は「対話」をキーワードに計画される。それは1軒の住まいとしての町との対話と、家族生活における対話である。「町に住む」ことの希薄化が及ぼす弊害は、放置自転車・自動車、ごみ問題、町のインフラの未整備、そして家のつくり様までさまざま。これらすべてが風景の喪失へとつながり、町に住まう感覚をさらに希薄にしていく。町は住まいの総体なのだから、ひとつの住まいで何が出来るかを各人が問うべきであろう。その一考察として、住み手と道を行き交う人が共有感をもてる境界のつくり様を、「対話空間」と位置づけ形象化してみた。たとえば、緑と境界の関係やプライバシーの日本的解釈による囲い方の手法、境界を固定的にせず、住み手の内発的選択で開閉できる装置、町と共有する壁としての外壁などで構成した。生活空間も同様に、固定空間の図式「女関+廊下・階段+nLDK」を解体し、家族室と女関の直結、家族室内の階段など空間の関係性を対話的に計画し、車不在時のカーポートを生活空間に取り込むなど、内外を生活的な解放性でつないだ。住み手が積極的に創意し、価値創造できる均質化しない広がり、丸太梁と登り梁の架構で家族空間の上に屋根があるといった空間性も表出させてみた。

●作品概要

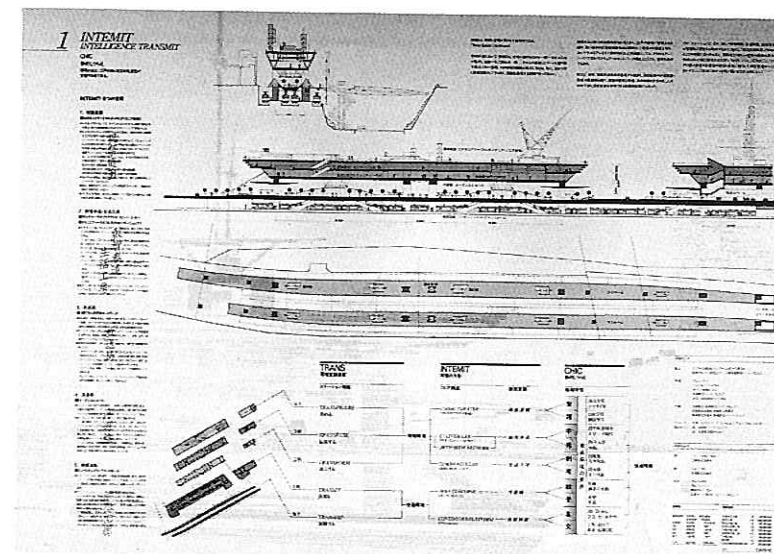
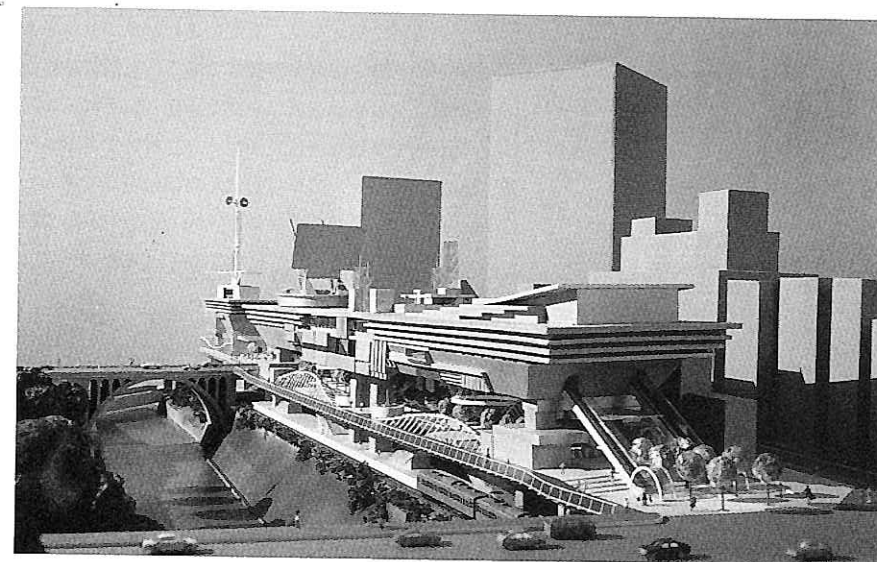
主な用途：住宅
敷地面積：310 m²
建築面積：125 m²
延床面積：165.3 m²
規模：地上2階
高さ：4.95 m (最高軒高)
主な構造：W造

OCHANOMIZU STATION

NORIYUKI ASAKURA

御茶ノ水駅

1989年 御茶ノ水駅公開プロポーザル・デザインコンペティション佳作
朝倉則幸
1968年卒業
GK設計
共同設計者：GK設計



鉄道とは、時間と空間が織りなす連続体である。無情にも定時に運行する「時」と、人々が集まり別れる「場」、それらの連続したシーンを繰り返す場としての「空間」。その時空の輪廻を超えて、駅とは単に流れ行く移動空間ではなく、感動を誘発する空間であってほしい。駅は、新しい情報環境、交通環境、地域環境などが重層的に交差する場所である。「環境変換装置 (TRANS)」としての時空に広がりを与え、利用者との新しい関係の構築を縦糸に、伝統ある御茶ノ水の「粋のしつらえ (CHIC)」としての江戸の粋と東京の先進性の特性を横糸に織りなす、時空連続体へと人々をいざない、21世紀に向かって飛び続ける方舟 (ARK) を提案した。

CAPSULE HOUSING

NORIYUKI ASAKURA

カプセルハウジング

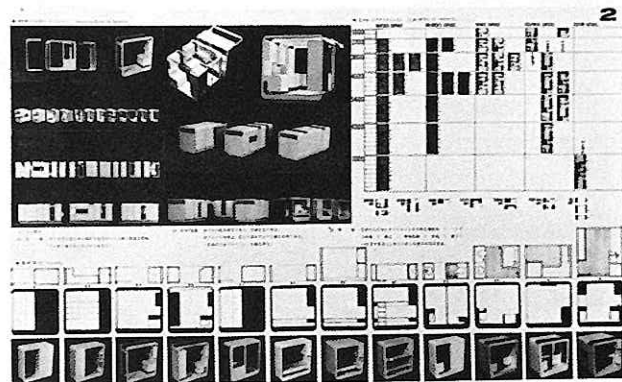
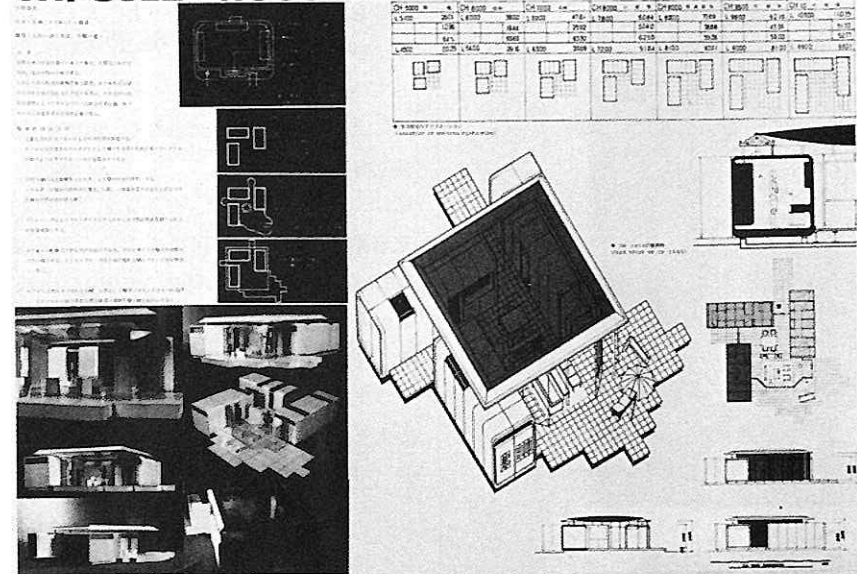
1969年 第2回ミサワホーム・プレファヴ住宅設計競技最優秀賞

朝倉則幸

1968年卒業

GK設計

CAPSULE HOUSING



カプセルハウジングは、工業化されたカプセルによって居住空間を形成する提案である。生活に必要な機能単位を最小の空間でカプセル化し、それらの組み合わせで多様な居住空間づくりに対応できるようにした。カプセル自体は自立した閉鎖空間であるため、カプセル同士を媒介する空間（家族の交歓の場）の設定も同時になされ、その重要性を強調している。

A NEW TYPE OF CONDOMINIUMS

COMPETITION WINNING PROJECT
MASAKO KONDO

“街かど”のあるミュージアム・ビレッジ

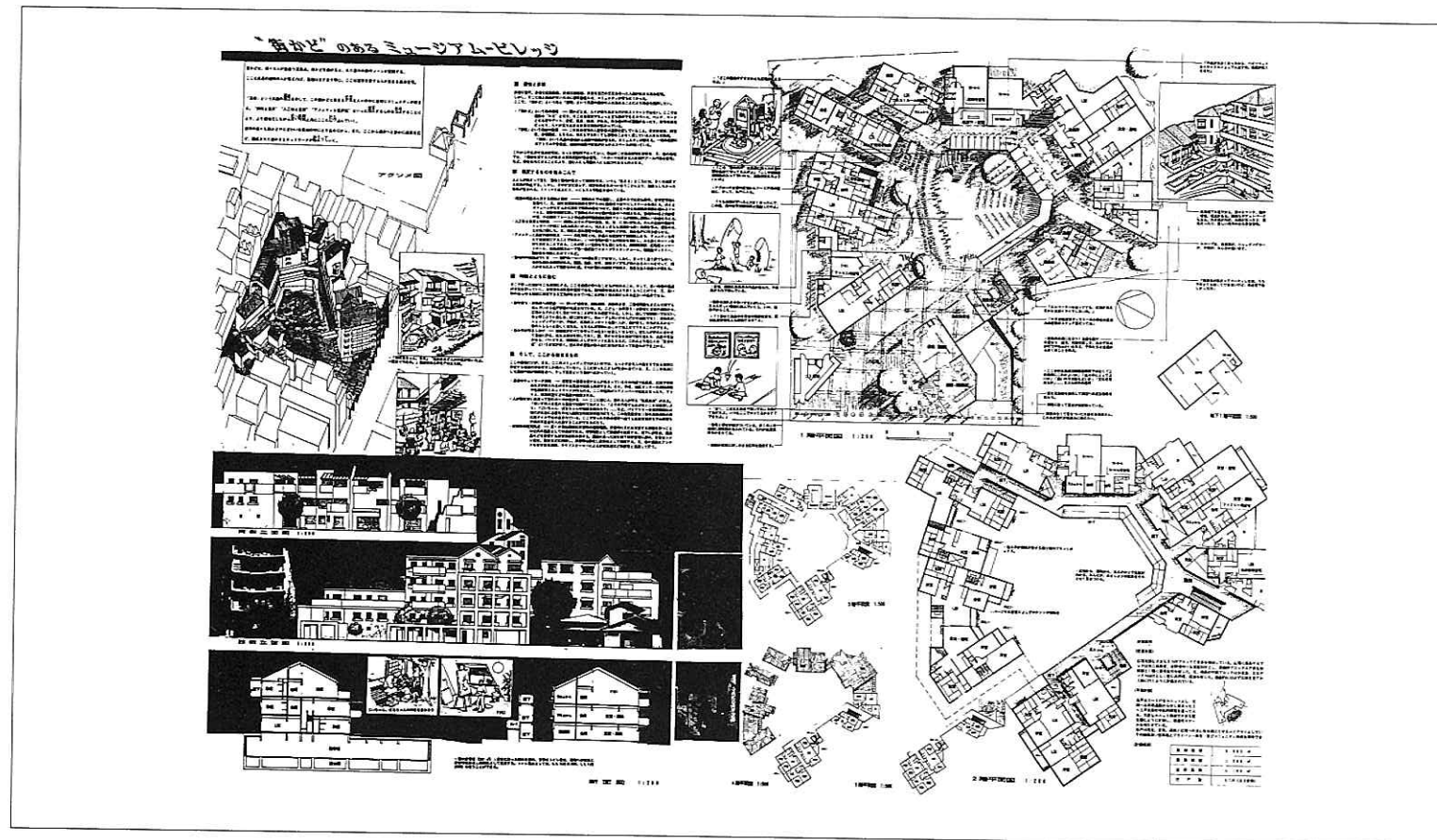
1990年 東京建築士会主催 第26回建築設計競技銅賞案

近藤(郡) 正子

1976年卒業

大成建設(株)

共同設計者：近藤弘文、飯塚浩一



港区にある都営住宅建て替えの設計コンペで、都市型集合住宅のあり方、都市景観への配慮、高齢化社会対応などが求められた。この案では、集合住宅内で人が出会い、立ち止まり、新たな景色が広がる「街かど」をできるだけ多くつくるというコンセプトのもとに計画した。景観に対してはボリュームを周辺住宅街のスケールに合わせ、延長線上の小公園のフレームや消防署の塔とも一体化するデザインとした。また、高齢者に対してはスロープを中庭の周

囲に回すことで、利便性、安全性を高め、さらに身障者や子どもたちが特別扱いでなく、逆にそういう人たちがいることで、街全体が楽しく、活気のある生活の舞台となるような建築とした。加えて、街づくりや助け合いのルール、住民同士のネットワーク、災害時の緊急体制などが、この集合住宅のみにとどまらず周辺地区にも広がっていけるソフト面のシステム提案も行っている。

●作品概要

- 主な用途：共同住宅
- 敷地面積：2,965 m²
- 建築面積：1,260 m²
- 延床面積：4,186 m²
- 規模：地上5階 地下1階
- 主な構造：RC造

THE KIOSK AS A STREET FURNITURE

TETSURO IKEDA

街なかのキオスク

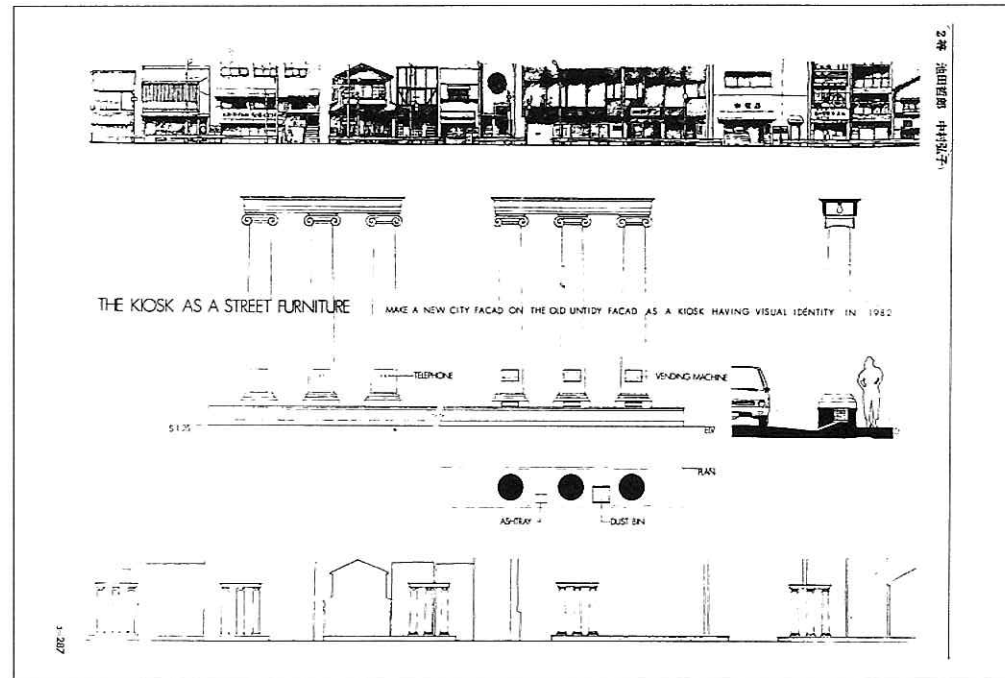
1982年 第2回ホクストン建築装飾デザインコンクール2等

池田哲郎

1977年卒業

(株)日本競馬施設

共同設計者：池田弘子



結婚直前、記念に2人でコンペに出品しようと思いついて参加した。費やした時間や手数に比べて結果がよく、うれしかった。表彰式では、故西澤文隆氏から「たいへんプロポーションが美しい」とお誉めの言葉をいただいた。

キオスクを拡大解釈してストリートファニチャー的に扱い、町内部の機能構成要素を押し込め、町に別のファサードをつくろうというのがコンセプトである。コラムをモチーフにしているが、これは鳥居であってもよく、当時の流れで表現しやすかったから用いたまでである。

AU VILLAGE

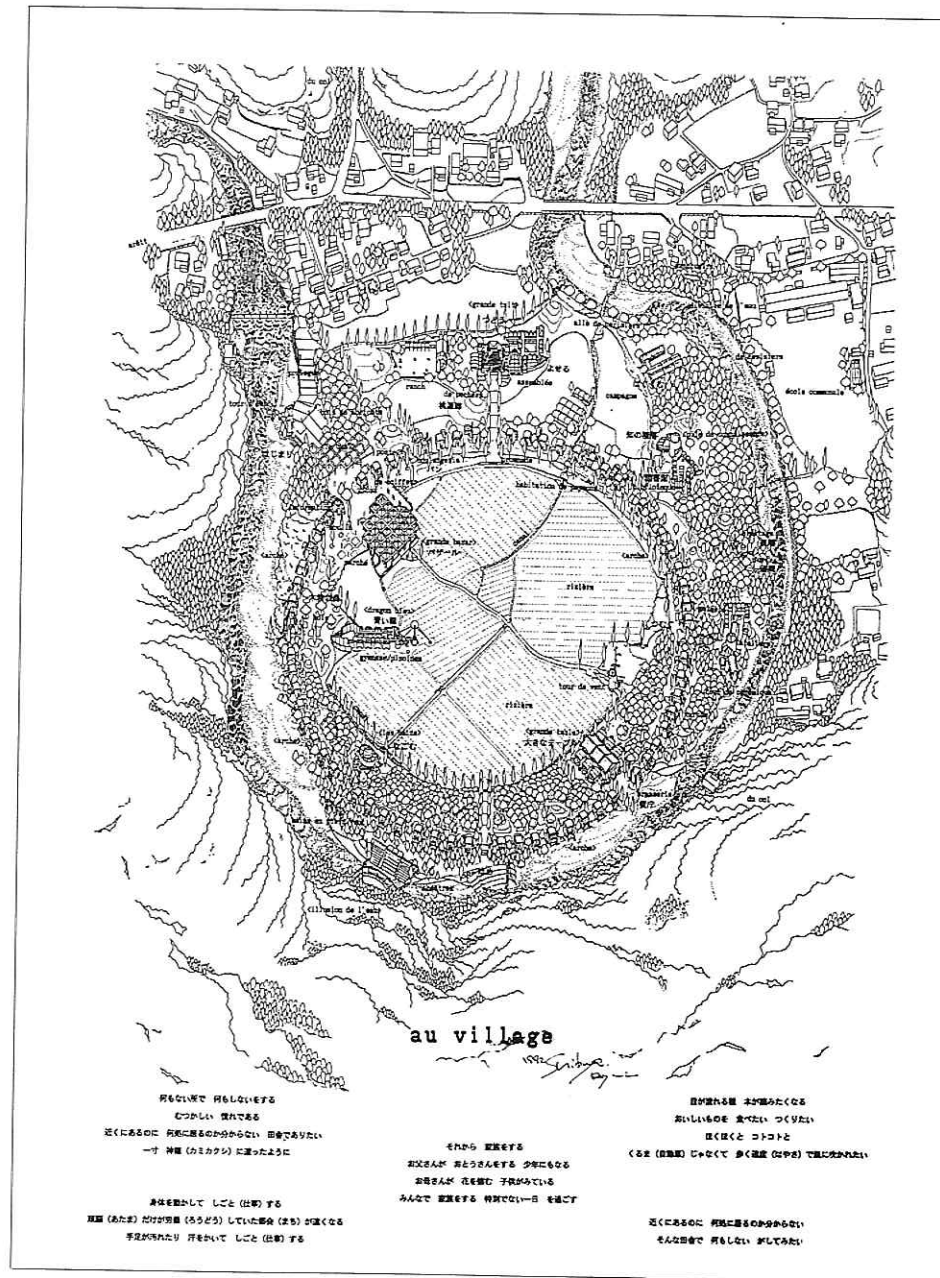
KAZUMI SIBUYA

高麗の里にて

第6回三州丸栄建築設計競技出品

渋谷和美

1987年卒業



描きながら 旅をする
自分の中を旅をする A0の紙面を旅をする
屋根を描きながら 回廊を彷徨う
地下室で瞑想し 浴場で歌う
よく練れていなければ迷子にもなってしまう

描いていない時も 旅をする
塔に上り 広場に座る
車窓をただ一日眺めて過ごす
頭の中が おなかいっぱいになると戻ってくる
そして 私の頭の中身は少し眠る
形を変え 勝手に結合し 膨張する
ゆっくりと ある時は急速に 活動を始める
つまり「外に出たい」と暴れるのだ
頭の中で100匹の象がシコを踏む状態が私を
再び 白紙に向かわせる

建築を始めて（先生に出会って）10年
かかってきたすべての主題をいくつかのレイヤとして重ね、また、ポキャブラリーの焼き直しの機会ともなった。卒業設計として形にしてから5年を経たが、コンペ、現作と通して、作品ではなく、その課程が、本来の意味での卒業制作と思える。
この旅は 素晴らしく 楽しかった

WATER HOUSE

NISSIN KOGYO COMPETITION WINNING PROJECT
YOSHIKI SHAKUTA

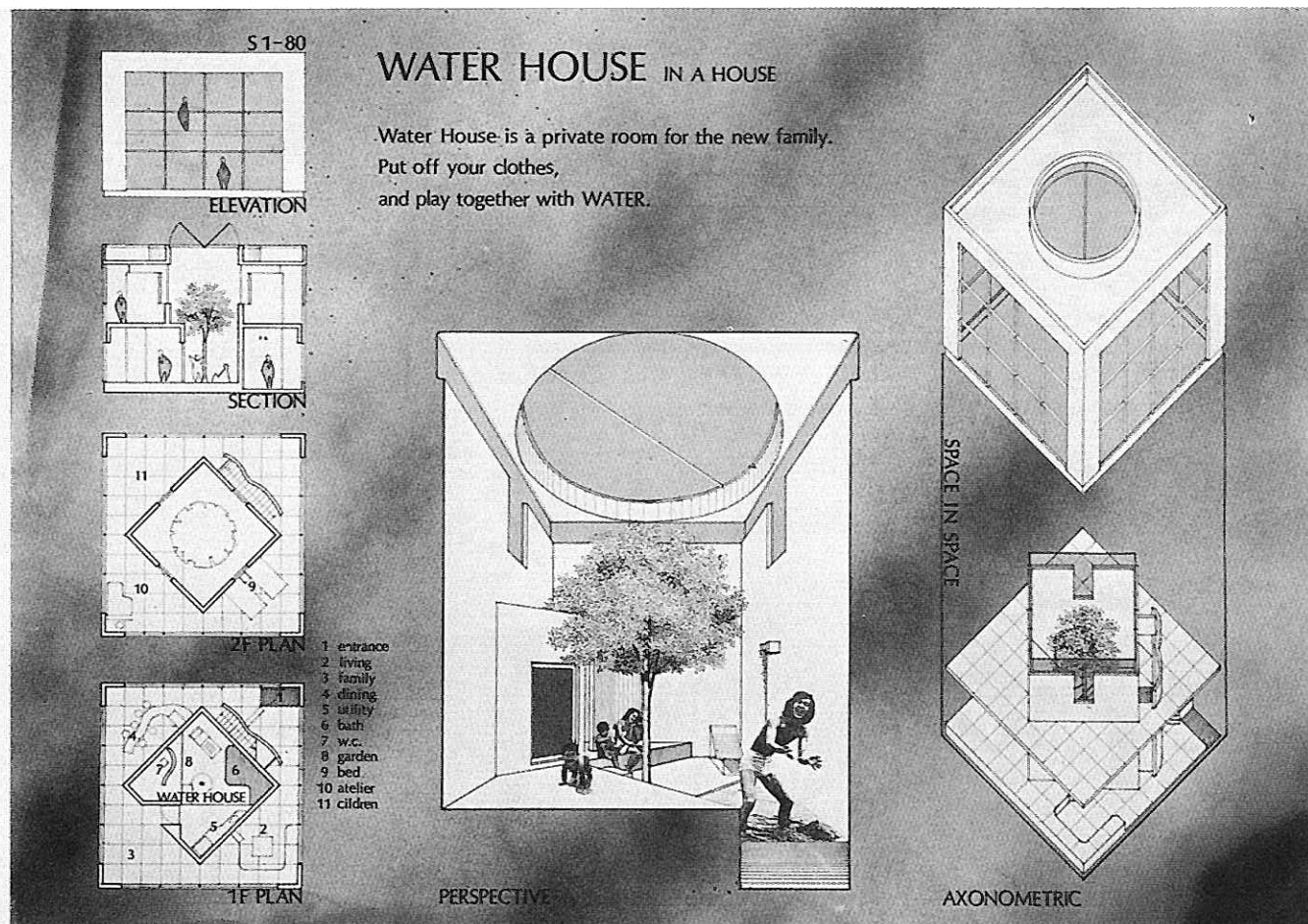
WATER HOUSE

日新工業建築設計競技 一等案

1977年

尺田可規

スクエア



卒業論文に「日本庭園様式考」というテーマを選び、現代の日本人にとっての庭の意味を考えている頃の作品。故倉俣史郎氏の講演に行き、「自動車の皮と中身をクルクルとひっくり返すとバイクになる」という話を聞いて、「そうか、日本の庭もクルクルとひっくり返すと中庭になるな」などと考えていた矢先、目の前にあったコンペがこれだった。日本の庭

園は、本来とてもプライバシーの高い空間。それをクルクルとひっくり返して家の真ん中に入れ、家族が裸体でつき合えるプライベートルームにしたというコンセプトを審査の先生方が理解してくれたかとはともかく、単純な発想とかたちが受けて一等入選。その後設計を続けて行く原動力のひとつとなった。

MODERN ARCHTECTURE BUILT ON A HISTORICAL SITE

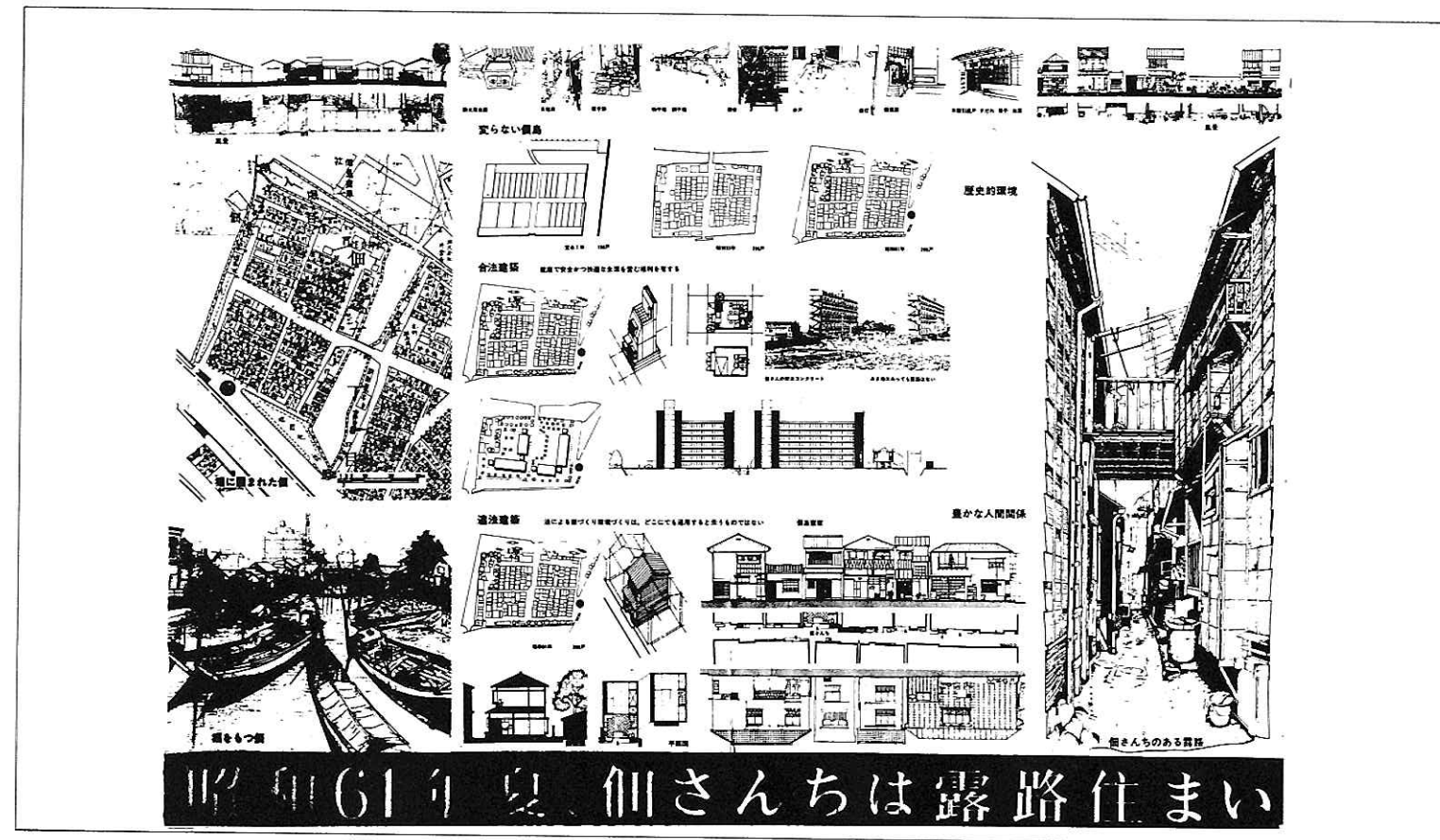
CENTRAL GLASS INTERNATIONAL STUDENT COMPETITION WINNING PROJECT
KAZUYUKI YANO, SETSUO TAKADA, KAZUO MATSUNARI, HIDEAKI SATO, TSUTOMU KOSEKI, MASAKO KONDO, HIDEHIKO WATANABE AND OTHERS

歴史的環境に建つ現代建築

セントラルガラス国際設計競技 佳作案

1976年

矢野和之、高田節夫、松成和夫、佐藤秀秋、小関勉、近藤（郡）正子、渡部英彦他



このアイデアコンペは、当時話題になっていた都市における保存の問題をテーマとしたものであった。われわれは、有名な歴史的遺跡や歴史的建築のある環境にはあえて目を向けず、名もないがなぜか歴史的な匂いがする都市の住環境に注目した。佃鳥の環境は、一戸一戸の建物は歴史的に価値あるものはゼロに等しい。しかし、豊かな人間関係を育む装置と

しての佃鳥の露路を何らかの形で保存し、新しい住環境づくりのシステムに組み込んでいきたいという提案をした。建て替え時の法的規制の遵守よりも、街並みづくり憲章的な「新しいルール」の提案をしたが、それが審査員に評価されたのかもしれない。
(松成)

ECOLOGICAL PARK

4TH ENVIRONMENTAL ARCHITECTURE DESIGN
COMPETITION WINNING PROJECT
JUNICHI OKABE

エコロジカルパーク

第4回建築環境デザインコンペ 学生賞案

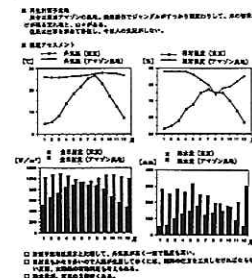
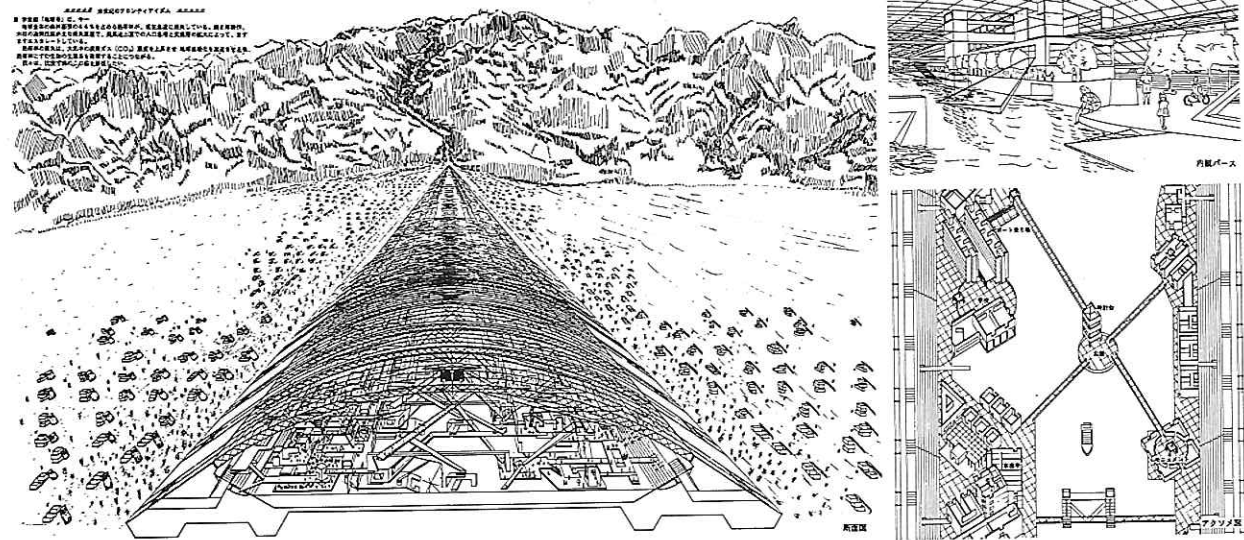
1990年

岡部淳一

1990年卒業

共同設計者：梅田和彦、金子有成

【浮遊する大地】

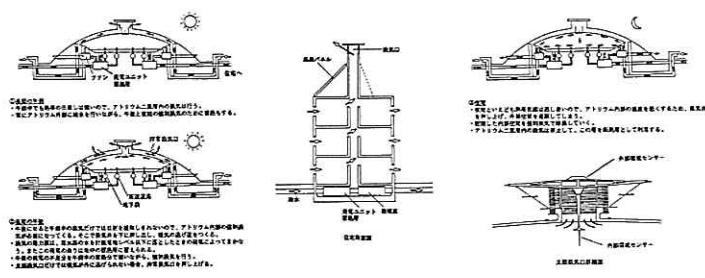


1. 浮遊構造
2. 浮遊構造の構造
3. 浮遊構造の構造
4. 浮遊構造の構造

5. 浮遊構造の構造
6. 浮遊構造の構造

7. 浮遊構造の構造
8. 浮遊構造の構造

9. 浮遊構造の構造
10. 浮遊構造の構造



7

その他

ここでは、これまでの分野に入りきれないものをまとめてある。御輿の設計、仏像の制作、インスタレーションに卒業設計と、なかなかバラエティは豊かである。ここに収録しきれなかった作品には、建築学会での論文発表、断熱材の選択と評価のチェックリストなどユニークなものも多い。(編者)

A GYMNASIUM, "OSAKA KOKUGIKAN"

GRADUATE DESIGN COMPETITION WINNING PROJECT
TOMIO KOBAYASHI

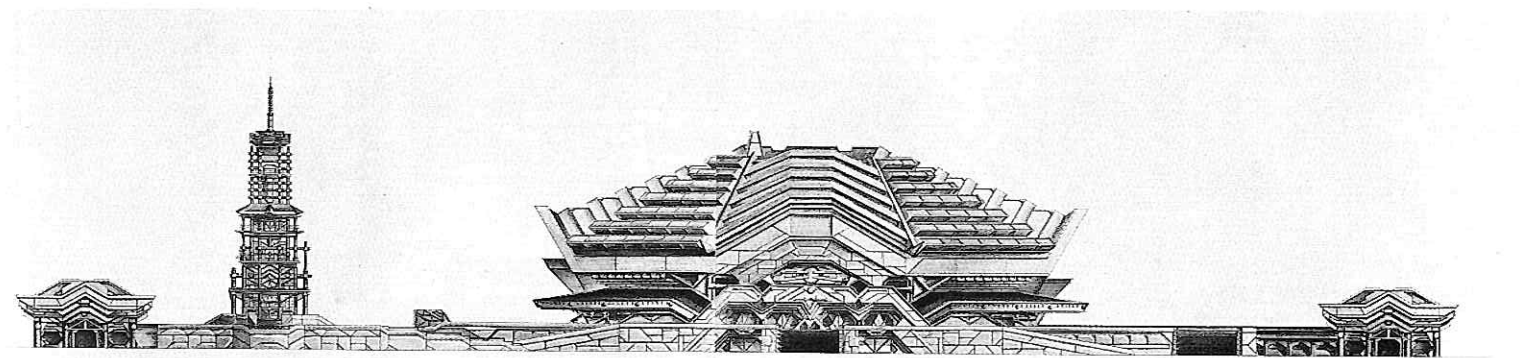
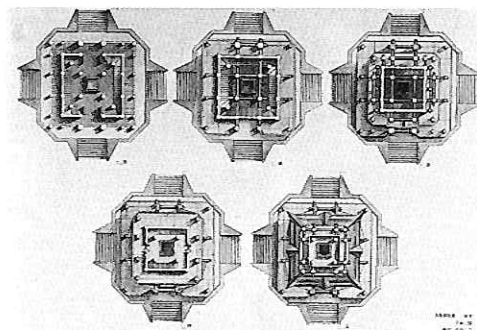
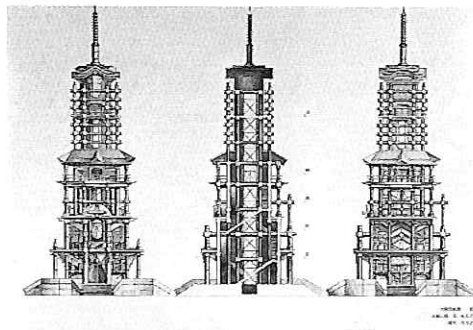
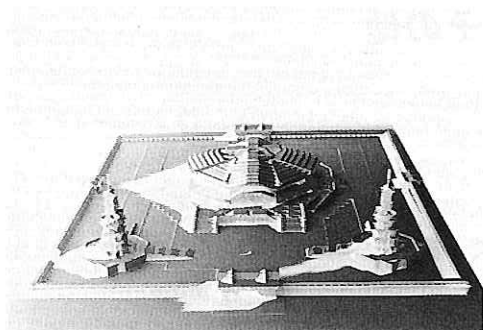
大阪国技館

1992年 JIA東京都卒業設計コンクール佳作案

小林富夫

1992年卒業

松下電工(株)



相撲はアジアから日本へ流入したが、現在は日本の国技として確たる存在となっている。また、木造建築もアジアから伝えられたものだが、今や日本を代表する建築文化といつてよい。

現在では大相撲は東京が主体となっているが、大相撲の原形である「相撲観戦」は大阪から始まったといわれている。商業化や街の繁栄と国民的スポーツ

をいち早く結びつけた大阪には、残念ながら国技館は存在しない。そこで、古建築の要素を取り入れた国技館を大阪に計画した。建物は東塔、西塔を東方、西方に見立て、薬師寺に代表される二塔一金堂の伽藍配置を取り入れ、塔内部は榮螺堂を例に二重螺旋階段で構造を決定している。

ART VOICE EXHIBITION (INSTALLATION)

ROPPONGI, MINATO-KU, TOKYO
TOSHIHIRO KONO

アート・ボイス展 (インスタレーション)

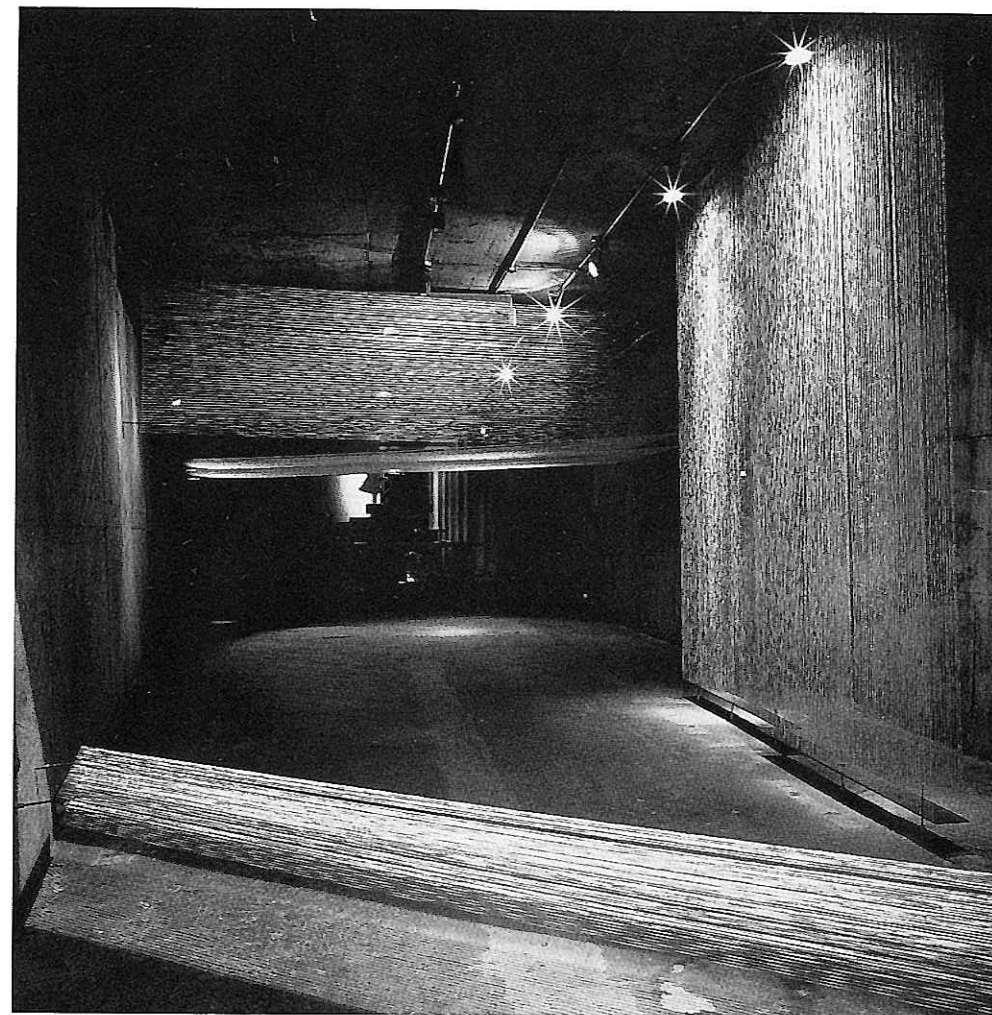
期間：1990年7月～8月 東京都港区六本木 ピアホール・ハートランド

河野俊博

1986年卒業

ストロングロドン

共同制作者：渋谷廣子



1989年、「ストロングロドン」という名称で創作活動を始めた。この作品は1990年夏、キリンビールが主催したアート・ボイス展に出品したものである。荒々しいコンクリート打ち放しの空間の、壁一壁、床一天井に多数の絹糸を等間隔にたるみなく張りわたしてある。糸を張るという行為は、ある「こと」に対し、「存在」を拡散させることによって生じる、ある「もの」の存在を感じることで、意識・無意識を自由に解放できるのではないか。

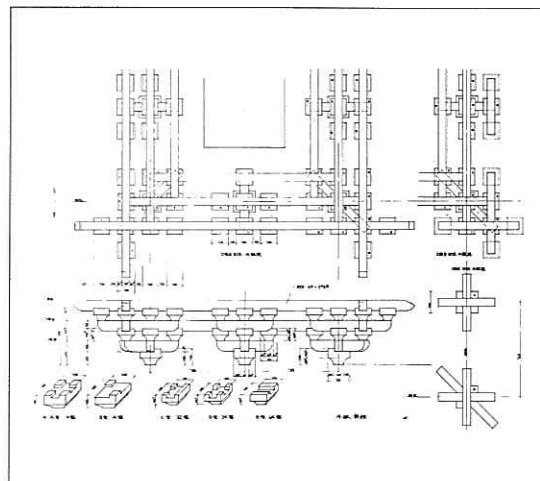
●作品概要

展示面積：30㎡

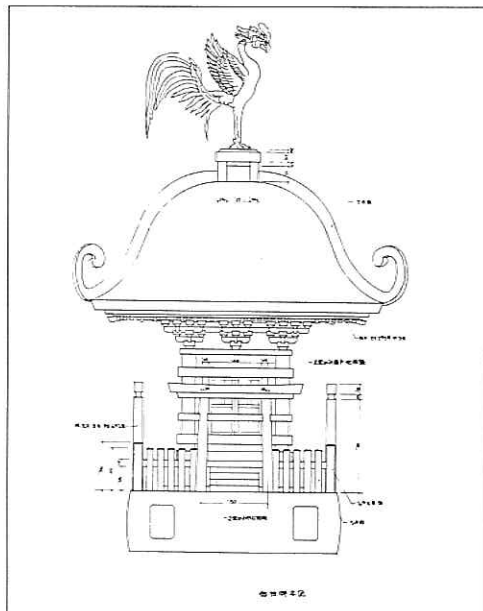
使用素材：絹糸（インドシルク）

MIKOSHI

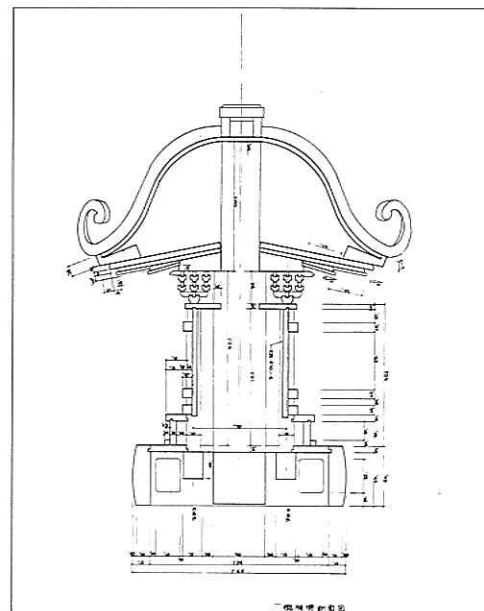
TORU YAMAMOTO



斗組詳細図



姿図



断面図

神輿

1986年

山本徹

1980年卒業

鉄設計工房

6年前、出身地の青年団から、過疎によって年々寂しくなる秋祭りを盛り上げるために、神輿づくりを依頼された。浅草の神輿屋や図書館などを調べてみたが、神輿の図面というものはなく、古建築の木割りを参考にしながら設計図を書いた。実物は図面より幅を2分大きくし、最上段の斗組みを2個ふやし、2段目の先端の肘木を通してある。製作は、村の青年団の有志、大工により、約1年がかりの仕事となった。材料は、村の長老が自宅を建てたときの端材だというケヤキの良材を寄付してくれた。塗装、飾り金物は、地元の仏壇屋に見積りの半額以下で、無理をきいてもらった。多くの人の厚意で完成したこの神輿は、自分の今までの仕事で最も思い出深く、また最も長く残る作品である。設計料は神社へ奉納した。

STATUES OF BUDDHA

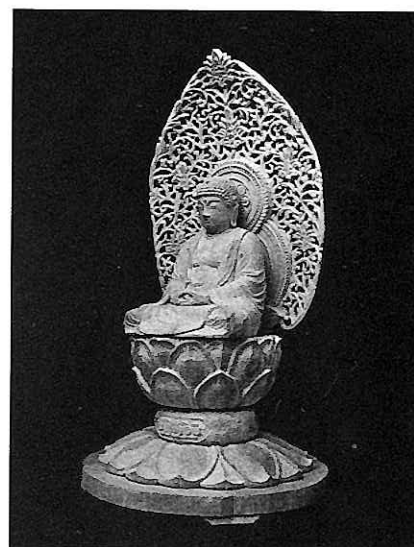
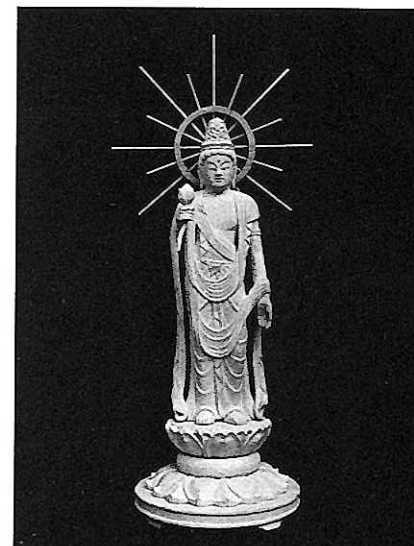
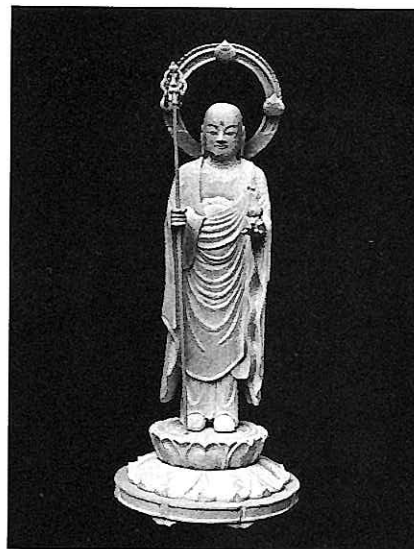
ITSUO MOMOSE

仏像

百瀬逸男

1973年卒業

(株) 新成建設



建築会社に勤務しているため、建物づくりは多いが、デザインは、たまに住宅を設計するくらいである。そこで今回は、近年趣味として始めた仏像彫刻を出品させていただくことにした。仏像彫刻は、美術として彫刻家に師事する場合と、仏師に師事する場合とでは、まったく入り方が異なる。私は後者であり、宗教芸術をライフワークにすべく、時間をさいて取り組んでいる。いままで関心なかった仏教にも興味をもち、奥の深さに驚かされ、精神的にも新鮮な日々を送っている。これらの作品はヒノキ、ヒバなどの一木づくりである。仏像の身の丈は、足裏から額口（髪の生え際）までをいい、座像の5寸は立ち上がれば1尺の像高になる。現在は、額口まで2尺の阿弥陀如来立像、1尺の不動明王立像の寄せ木づくりの大作2体と、一木で1尺の不動明王立像の計3体を製作中である。像高2尺の立像は、1尺の2倍の高さだが、ボリュームは8倍になるので迫力があり、彫りごたえもあるため、完成が楽しみである。広瀬先生には古建築を教えていただいたが、こうして善光寺をシンボルとする郷里で仏像を彫るのも、どこかでつながったようで、人生の面白さを感じている。